

著者が語る

小林隆児著

『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』

—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて



ミネルヴァ書房

- ・A5判/260頁
- ・2014年刊行
- ・本体3200円

◎「関係」に着目するようになったのはなぜか

そもそも私が「関係」の重要性に着目する直接的な契機となったのは、二〇年ほど前の鯨岡峻氏との出会いでした。当時教鞭をとっていた大分大学に集中講義で氏をお招きし、夜は温泉とふぐを楽しんでいたのですが、その場で私が日頃の臨床での疑問を投げかけたとき、氏から発達心理学者ウェルナーの「相貌的知覚」(ウェルナー著、鯨岡峻・浜田寿美男訳「発達心理学入門」ミネルヴァ書房)という概念を覚えてもらいました。当時私が温めていた幾多の臨床経験は、それをきっかけにして火花を起し繋がっていくのを実感しつつ、知的興奮を味わいながらつぎつぎと論文文化していきました(最初の論文は「自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理」精神科治療学、一九九三)。

そしてまもなく東海大学に移り、そこでMIU(母子ユニット Mother-Infant Unit)を立ち上げ、本格的に乳幼児期の母子に対する「関係」臨床を開始しました。一四年間で関与した母子例は八一組に及び、その中で新奇場面法を適用して母子関係を観察したものは五五例でした。

開始した当時からずっと、MIUの運営はすべて私ひとりで行わなければなりませんでしたが、次第に多くの学生が熱心に取り組んでくれるようになりました。今振り返ると、当時はまだ「関係」をみるとはどういうことか、その核心はつかめず、つきつぎに相談に訪れる親子を丁寧に見ることだけに忙殺されていました。毎週金曜日一時間刻みで多いときには計八例みた後、夜三時間にわたってその日の臨床をビデオで振り返りながら議論を積み重ねました。

「関係」をみることの核心を掴むことができたのは、MIUを離れ、哲学者(西研氏、竹田青嗣氏ら)と出会ったことに依ります。そこで私はフッサール現象学の核心に触れることができ、それはまさに「関係」をみることに本質的に同じことだと確信したのです。フッサールは独我論として敬遠されるところがありますが、人間は結局自らの主観を通してしか世界を掌握できないという限界を徹底して考え抜くことの重要性をそこで学びました。母子関係でのこころの動きの観察を蓄積することによって、私は患者・治療者関係でのこころの動きを手取るように感じることができるようになりました。それは精神分析でいう「転移」そのものだということにも気づくことができたのです。そこで得た知見は膨大なものですが、本書はその第一弾ということになります。



小林 隆児

(こばやし りゅうじ)
1949年生まれ。西南学院
大学人間科学部教授。
『自閉症のこころをみつ
める』(岩崎学術出版社)。